

令和元年度後期 学生による授業アンケート 調査の結果

令和2年9月

志學館大学事務局学務課
志學館大学 I R室

令和元年度後期 学生による授業アンケート調査の結果

この報告は、学生授業アンケート結果の概要を示し、個々の教員が自己の担当授業のアンケート集計結果を基に自己点検・評価をするために必要な統計的情報を示すことで、授業の改善を考える上での参考にして貰うことを目的とする。また、これらの資料を分析することで、本学の教育改善に資するための情報を得ることを目的とする。

1. 調査の概要と資料

令和元年度後期の質問及び回答選択肢は同年前期と同じで、平成30年度のものをはほぼ踏襲しつつ、若干の修正を加え、以下のとおりであった。なお、以下では質問項目の順序を入れ替えグループ分けしてあるが、この分類はアンケート時に示されていたものではない。

【授業スキル関係】

- Q1. 授業の分量は適切であった (5. 強くそう思う～1. まったく思わない)
- Q2. 授業の進み具合は適切であった (同上)
- Q3. 教員の教え方はわかりやすかった (同上)
- Q4. テキスト、プリント、板書、提示資料等は理解の助けになった (同上)
- Q5. 毎回の授業のねらいははっきりしていた (同上)

【アクティブラーニング関係】

- Q7. 授業には、新しい知識の獲得や発見に、学生を導くような工夫や仕組み、働きかけがあった (同上)
- Q8. 質問や意見に適切に対応してもらえた (同上)
- Q9. 予習、復習の課題やアドバイスは適切に与えられた (同上)
- Q14. 積極的な参加 (自ら考えながらの受講) が求められる授業だった (同上)

【教育の質保証関係】

- Q6. 授業は講義要項に沿った内容であった (同上)
- Q16. この科目の「到達目標」(シラバスに記載)に達することができたと思いますか

【学生の学習行動関係】

- Q10. この科目の予習に毎週当てた平均時間 (1. していない、2. 30分程度、3. 60分程度、4. 90分程度、5. それ以上)
- Q11. この科目の復習に毎週当てた平均時間 (同上)
- Q12. 授業時間内にこの科目を熱心に学習した (5. 強くそう思う～1. まったく思わない)
- Q13. 授業時間外にこの科目を熱心に学習した (同上)
- Q15. あなた自身の受講態度の総合評価 (10. 高⇔1. 低)

その他 自由記述による意見

Q14は平成30年度のQ10と同じで、Q16は30年度に新設した質問である。Q11の学習時間の「5. それ以上」は簡易的に120分として分析したのと、演習科目と共通教育科目のみに係る質問には無回答のものが多かったため、また、大学院課程では資料数が少なかったため、分析対象としなかったのは、30年度以降同じである。

2. 分析方法と結果

学士課程の今期の開講授業から、アンケート調査の対象となっていない授業や回答なしの授業を除き、249(256, 250)授業で回答が得られた(括弧内は、平成31年度前期及び同30年度前期の値である(値が一つだけの場合は、平成31年度前期を示す)。以下、括弧内において同じ)。このうち回答数が10(10, 5)以上の148(160, 204)授業を分析対象とした。各授業の質問項目ごとの評価点は、複数の学生による回答の平均値と標準偏差で代表した。以下、この平均値の全授業にわたる平均値と標準偏差及び標準偏差の全授業にわたる平均値を求めた。

回答数が10(5)未満で分析対象としなかった授業は101(96, 40)授業であった。回答数10以上を分析対象とした理由と、それゆえに分析結果の解釈に統計学的には一定の留保が必要である点はこれまでと同じである。

2.1 授業の内容及び方法

(1) 回答率

分析対象とした148授業の平均回答率（全受講者数で全回答数を除いたもの）は0.44(0.43, 0.47)、で、昨期と同程度であった。なお、アンケート対象すべてである249授業では、回答率は0.42であった。中には受講数80で回答者が10名に満たない授業もあり、一部の授業では教員から学生への周知が未だ不十分であったものとする。

(2) 個票の質問別回答平均値

授業ごとのQ1～Q9、Q14及びQ16の質問への回答の平均値の分布を図1のヒストグラムに示す。

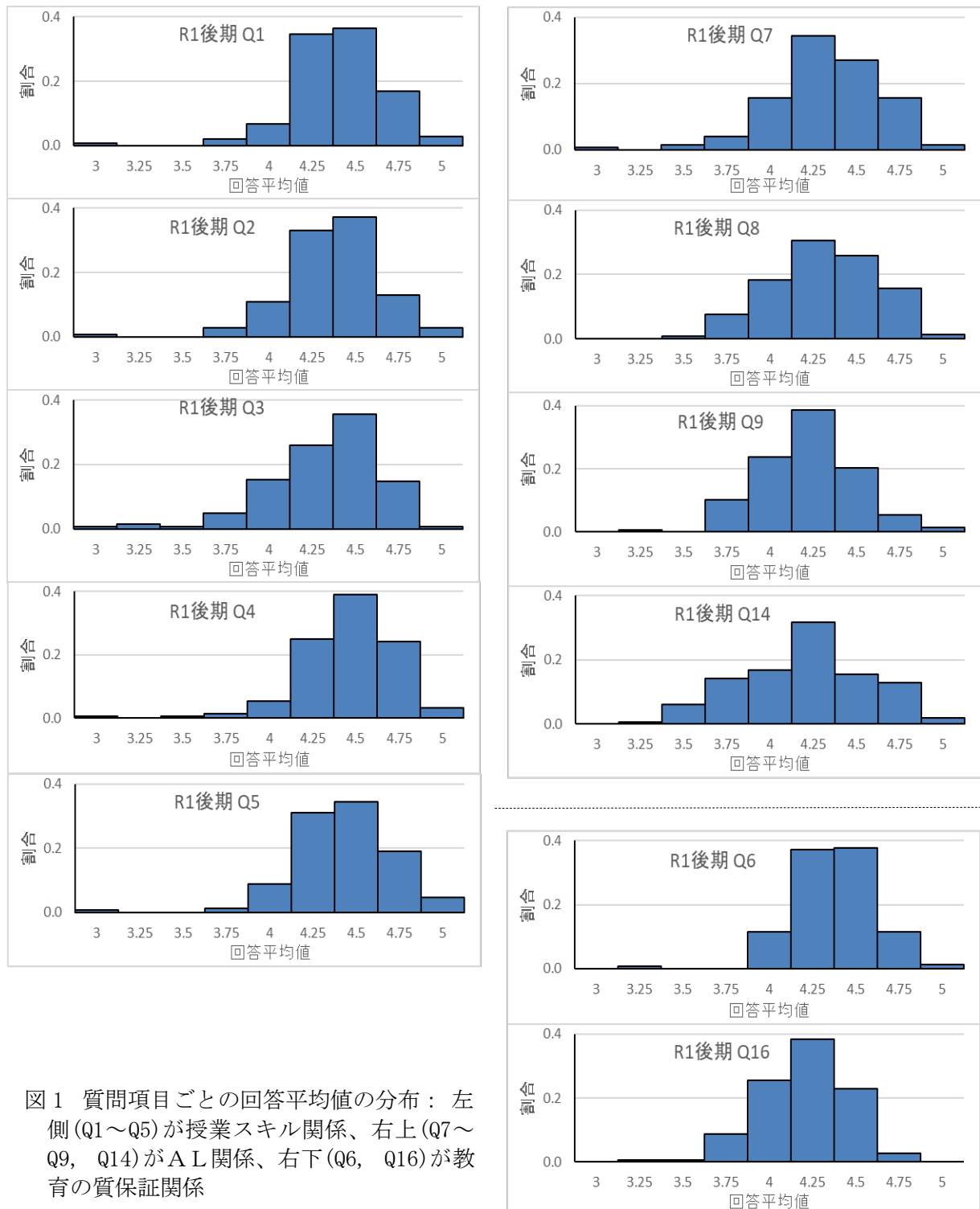


図1 質問項目ごとの回答平均値の分布：左側(Q1～Q5)が授業スキル関係、右上(Q7～Q9, Q14)がAL関係、右下(Q6, Q16)が教育の質保証関係

多くの質問項目で、ごく少数の左に大きく離れた例がありつつ、概ね左右対称又はやや左（評価点が低い側）に偏りつつも正規分布型のグラフとなった。グループごとで見ると、授業スキル関係ではすべての項目で、モードは4.25以上～4.50未満の階級にあったのに対して、AL関係及び質保証関係の項目では、Q6を除き、4.00以上～4.25未満と一階級低い側にモードがあった。

授業ごとのQ1～Q9、Q14及びQ16の質問への回答の評価点の平均値と標準偏差を、質問グループに分けて、表1に示す。すべての質問項目で回答評価点の平均値は4を超え、本年度前期に比べ、平均値は高く、標準偏差は小さかった。これらは、適切に実施されたと受け止められている授業が多く、またその程度が向上していることを示唆している。

個々の授業で、上記の評価からの「外れ」が小さい（平均的である）と判断する目安として、平均値 $\pm 0.5 \times$ 標準偏差の値を、表1の下2段（表の上・下限値）に示す。個票の平均値がその範囲に入っていれば「ほぼ平均的レベルにある」と評価できる（統計学的には厳密なものではない）。授業ごとの、教員による自己点検に供されたい。

表1 授業の質問項目ごとのアンケート結果の平均値と標準偏差等

	授業スキル関係					AL関係				質保証関係	
	Q1	Q2	Q3	Q4	Q5	Q7	Q8	Q9	Q14	Q6	Q16
平均値	4.26	4.24	4.21	4.33	4.29	4.19	4.19	4.07	4.06	4.23	4.07
標準偏差	0.28	0.30	0.35	0.28	0.27	0.29	0.30	0.28	0.35	0.23	0.25
上限値	4.40	4.39	4.39	4.47	4.42	4.34	4.34	4.21	4.24	4.34	4.20
下限値	4.12	4.09	4.04	4.19	4.15	4.05	4.04	3.94	3.89	4.12	3.95

(3) 「優れている」及び「改善を要する」授業数

明らかに優れている又は改善が必要と判断する目安として、平均値 $\pm 1.96 \times$ 標準偏差の値を表2示す（表2の上・下限値）。また、この上・下限値の範囲を外れ、「優れている」と「改善が必要である」と評価される授業数を下2段に示す。

今期は、質問項目ごとの「優れている」が0～5授業（0～2, 1～7授業）で、昨期とあまり変わらなかった。「改善を要する」は、1～6授業（4～9, 3～10授業）で、やや減少した。「改善を要する」授業の減少は、既述のように、平均値が上がり、かつ以下の(4)項で述べるように、評価点の分布が評価の高い側に移動したために生じたものである。全体として授業の改善が進んだ結果である可能性が高い。

表2 授業の質問ごとのアンケート結果の平均値と標準偏差等

	授業スキル関係					AL関係				質保証関係	
	Q1	Q2	Q3	Q4	Q5	Q7	Q8	Q9	Q14	Q6	Q16
上限値	4.80	4.83	4.90	4.88	4.81	4.76	4.78	4.62	4.76	4.68	4.56
下限値	3.72	3.65	3.52	3.78	3.76	3.62	3.60	3.53	3.37	3.78	3.59
優れている数	2	0	2	2	3	1	3	5	2	2	3
改善が必要な数	3	4	6	4	3	3	6	2	1	1	3

(4) 回答平均値の分布の変化に見られる改善と課題

適切に実施されたと受け止められている授業が多く、またその程度が向上していることを示唆している傾向は、平成29年度から継続している。

質問グループごとで見ると、授業スキル関係に比べて、AL関係及び教育の質保証関係では、学生の納得度はやや低かったと言える（Q6を除く）。このことは、学生の能動的な学習を引き出す取り組みや、シラバスに記載された「到達目標」に達することができたかといった点では課題が残っていることを示唆している。この点は、昨期の報告書で、Q9、Q14、Q16の一群で回答平均

値が最も低いと指摘した課題が続いていると言える。

特に、昨期に新設した「Q16. 「到達目標」（シラバスに記載）に達することができた」については、モードは他の質問と変わらなかったが、高い評価点側の分布が少なく、このことが平均値の低さに繋がったと考えられる。教員が授業計画・実施上で未だ意識する程度が低いことを反映していると推量され、今後の課題である。

2.2 学習行動

学習行動に関する質問 Q10～15（昨年度に比べて、質問番号は変わっているが、内容と順序は同じである。）の結果を示す。平均の予習時間は 15 分（17 分）、復習時間は 21 分（22 分）で多くなかった。ヒストグラムからは、予習より復習にやや重みが置かれている傾向が看取できる。

授業内外での学習熱心度では、授業外学習の自己評価が際立って低かった。自己の学習態度の総合評価は、5 点満点に換算すると、3.9 程度であった。

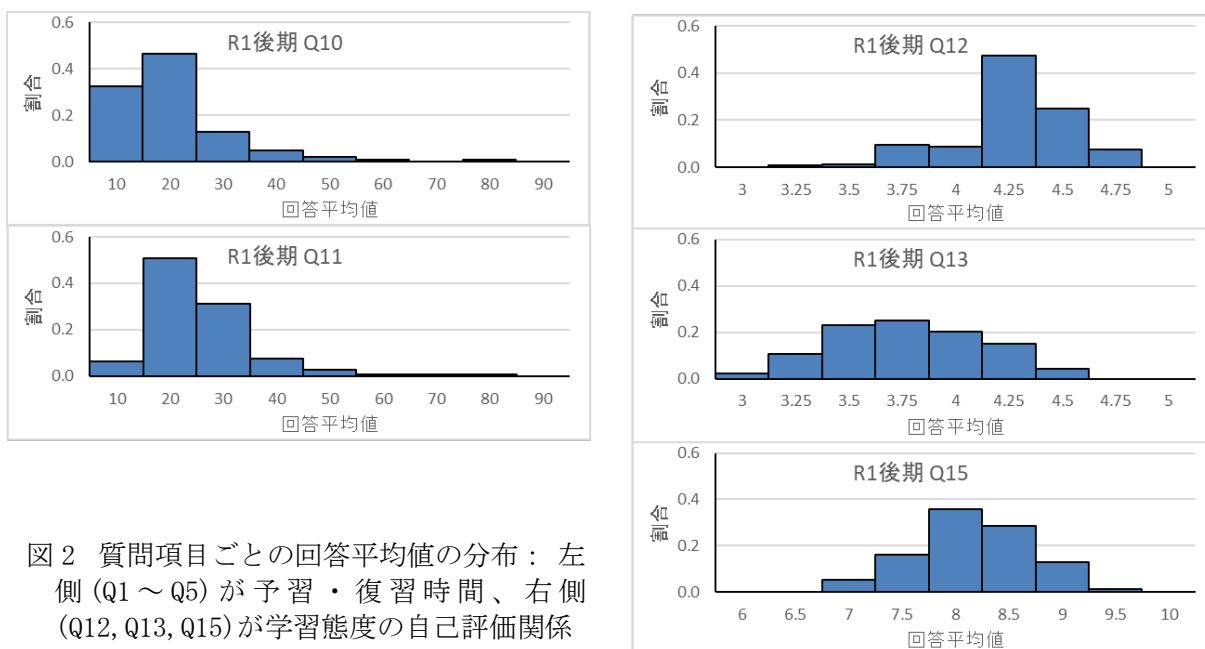


図2 質問項目ごとの回答平均値の分布：左側(Q1～Q5)が予習・復習時間、右側(Q12, Q13, Q15)が学習態度の自己評価関係

表6 授業の学習行動に関する質問ごとの結果の平均値と標準偏差等

	Q10	Q11	Q12	Q13	Q15
平均値	15.0	20.7	4.13	3.63	7.89
標準偏差	10.4	10.0	0.27	0.36	0.52
上限値	20.3	25.7	4.26	3.80	8.15
下限値	9.84	15.7	3.99	3.45	7.63

2.3 自由記述

自由記述欄への記載事項を、授業内容及びスキル関係、アクティブラーニング関係、教育の質保証関係に分類し、かつポジティブとネガティブな意見に区分し、分析した。ここでは、専門的内容へのコメントや担当教員への謝意等は含めず、授業に係る一般的事項のみを抽出した。また、荒い言葉遣いを修正し、要点のみに短縮してある。

ネガティブな意見がやや多かったものの、ポジティブな記載や担当教員への謝辞、賛辞等も多く、全体的に十分にバランスのとれた、参考になる情報を含むものであったと考える。

最も多かったのは、授業スキル等に関するネガティブな意見で、「ホワイトボードが光って見えにくい」「声が小さい」といった「ごく些細な」コメント・要望が多かった。「プリントを穴

埋め式にして欲しい」「板書を増やして欲しい」といったコメントがあった。また、授業管理面では、おそらく真面目に学習に取り組んでいるのであろう学生からの、遅刻や私語が多い学生と同列に扱われることへの不満も目立った。授業形式の面で、「オムニバス形式で伝えたいことが何か分からなかった」という意見は、オムニバス形式の授業のコーディネータの重要性を示唆するものであろう。

アクティブラーニング関係では、「事前課題があるのがよかった」、「質問の時間が積極的に取られていた」といったポジティブな記載が多かった。ネガティブな意見がごく少なかったのは、この領域での取り組みが学生からは不満を持つほどには意識されていないことを示すものかもしれない。

一方、教育の質保証関係では、「授業方法はシラバスにある通りであった」といった意見が欲しいところであるが、ポジティブな意見はまったくなかった。これも、学生からはあまり意識されていないか、または「できて当然」と受け止められているせいかもしれない。

3. まとめ

本期の質問項目を、授業のスキル（内容や方法を含む）、アクティブラーニング、教育の質保証関係に分けて分析したのは、今期が初めての試みである。質問項目ごとの評価点の平均値及びその分布から、授業のスキル（内容や方法を含む）に関する領域では、改善が進んでいると考えられる。これに比べて、アクティブラーニングや教育の質保証に関する領域での学生の納得度はやや低かった。

これらの結果から、本学の授業は実施手法は確実に改善しているが、学生の自主的な学習行動を引き出したり、学習の達成感を感じさせるところまでは至っていないと考えられる。今後の改善に向けた課題としたい。

引き続き、少数の学生による荒い言葉遣いによる記入があったが、本アンケートの有効活用に弊害を与える可能性がある。不満足等については論理的に説明するよう指導する必要がある。ただし、そういった点を割り引き、虚心坦懐に読めば、学生が求めている授業像について、大いに参考となる情報が得られると考える。

平成29年度の本分析開始以来、質問事項や選択肢に改善を加えてきた。現在の質問は、学生の能動的な学習行動や学修の達成感を問う質問も含まれており、今後暫くは継続したモニタリングに利用できるものと考えられる。ただし、「Q8. 質問や意見に適切に対応してもらえた」は、アクティブラーニングの視点を明確にするために「質問や意見を述べる時間が設定されていた」と変えた方がよい。また、「Q15. あなた自身の受講態度の総合評価」も、授業内のみでの学習と誤解されるのを避けるため、「あなた自身のこの科目に関する学習態度の総合評価」と変えた方がよい。